

「黙」考

やまね まさゆき
山根 正幸

●連合 企画局長

新しい言葉がコロナ禍の克服に奮闘する現場から生まれている。飲食店で会話を控える「黙食」、温泉やサウナでの「黙浴」、スポーツジムでの「黙トレ」など。感染防止と事業・雇用維持の両立に向けた苦労を奏功させるためにも利用者の節度ある行動が大切だ。ただ「黙食」だけは初めて見るような気がしないと思っていたら、仏教では既に「もくじき」としてあるようだ。天地の恵みへの感謝・食事時間を大切によく噛んで食べる、という意味とのこと。ただ「静かに」だけでなく、誰か・何かに想いを巡らせながら行動するといった積極的な意味も込められている、などと勝手に解釈してみる。

さらに調べてみると「黙」には「世の中に表れない」という意味もあるらしい。コロナ禍が国内に広がって1年余り。これまで3つの感染拡大の波は経済と雇用に大きな影響を及ぼしている。2月に入り日経平均株価が30年ぶりに3万円のラインに触れたが、これまでの金融緩和で株価と実体経済の乖離がますます大きくなってはいないか。昨年、全国の連合に寄せられた電話相談の件数は前年から3割増の約1万8,400件、メールやLINEの相談を含めると2万件を超えた。サービス業や医療福祉の職場で働くパート・派遣・有期契約の方からの相談、そして生活に困難を抱える方々からの訴えの増加が目立つ。さらにその向こうには不条理に黙って耐えざるを得ない人たちがいるのが実態で

はないか。相談対応に加えて、寄せられる声をもとに、課題を形にして世の中に問う営みがますます求められている。

世の中への見える化という点では東日本大震災も同じ。10年の間にハード面の復旧は進んだ一方、メンタル面やコミュニティの影響など、時間の経過とともに表に見えないところで課題が深刻化しているとの指摘もある。孤立や喪失感が長期的に社会の安定に影響を及ぼすのは震災もコロナも共通。関心を持ち続けていかなければ。

見えにくい課題を掘り起こし解決につなげるうえで、調査の持つ役割は大きい。コロナ禍で対面調査がやりにくい、アンケートの回収に手間取るといった話を聞くこともある。こういう時だからこそ、工夫しながら調査を進めて行くことができればと思う。

「黙」についてあれこれ考えていた中、オリパラ組織委員会・会長（当時）の女性差別発言が飛び出す。発言自体もさることながら周囲が諫められないことに唖然とした。そしてミャンマーでは軍事クーデターの勃発。ニュース映像の中で、日本での抗議デモに参加したミャンマー人女性が、コロナ禍の中でのデモを詫びる看板を掲げて歩いていたのが印象に残る。差別の解消から民主主義の追求に至るまで、共通して必要なのは「脱黙」であり、社会の中で声をあげることをお互いが保障していくことだと思う。